

## 今号の作業

# フロントフォークに フロントダンパー(右)を取り付ける



今号ではフロントダンパー(右)を組み立て、前号までに組み立てたフロントフォークに取り付ける。また、2号で組み立てたシリンダーヘッドカバーに、タペットアジャスティングホールキャップ4個を取り付ける。フロントダンパーの組み立て手順は前号と同じだが、左右の「見た目」が同じになるよう組み立てる必要があるので注意が必要だ。

### 今号のパーツ



- ①フロントダンパー(右)×1
- ②フロントフォークボルトヘッド×1
- ③ビス(Eタイプ)×2  
(※1本は予備)
- ④フロントフォークリブ×1
- ⑤フロントフォークブーツ×1
- ⑥タペットアジャスティング  
ホールキャップ×4

※フロントフォークブーツに  
向きの指定はありません。  
※⑥はすべて同じ形状です。

※モデルの設計上、パーツの形状が実車とは異なる場合があります。  
※「組み立てガイド」で紹介しているパーツは実際に付属するパーツと一部仕様が異なる場合があります。

### 使用する道具

- ・+ (プラス)ドライバー(1番)
- ※グリップ部が細いタイプと太いタイプの2種類があると便利。
- ・つまようじ(先端が細い棒状のものであれば代用可)

### 用意するもの

- ・フロントフォーク(6号で組み立てたもの)
- ・シリンダーヘッドカバー(2号で組み立てたもの)
- ・グリス(6号の作業後に保管しておいたもの)

STEP  
1



前号の組み立て作業で使用し、保管しておいたグリスを用意する。閉じておいた袋の端を開き、つまようじの先端に盛り付けるようにして取り出す。なお、今号で使った残りのグリスは後の号で使用するので、大切に保管しておこう。

STEP  
2

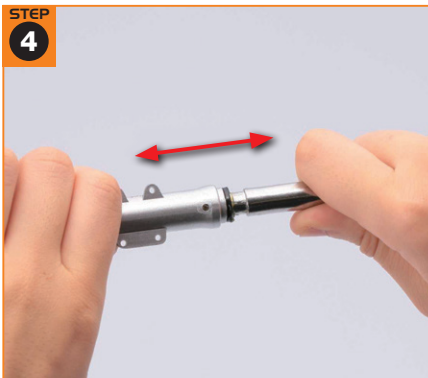


完成済みで提供される①フロントダンパー(右)の接合部分(黒い樹脂製パーツと、メッキ処理されたダンパーロッドの合わせ目)にグリスを塗布する。

STEP  
3



メッキ処理されたダンパーロッドには、細い溝が開けられているので、その中にグリスを“詰め込むように”塗布する。



フロントダンパー(右)の本体部分とダンパーロッドを持ち、数回伸縮させる。こうすることによって塗布したグリスがダンパー内部に塗り広げられる。



⑤フロントフォークブーツを用意し、フロントダンパー(右)のダンパーロッド側から差し込む。フロントダンパー(右)の本体上部には段差が設けてあるので、フロントフォークブーツを段差まで押し込む。



④フロントフォークリブを、フロントダンパー(右)のダンパーロッド側から差し込む。フロントフォークリブの側面には段差があり、径の小さい側から差し込む。



フロントフォークブーツにフロントフォークリブをはめ込む。ダンパーロッドには「平らに加工されている部分」があるので、フロントフォークリブをゆっくりと回しながら、位置を合わせて差し込むようにする。



前回の作業で組み立てたフロントフォークを用意する。フロントダンパー(左)が確実に固定されているか、左右ウインカーのステー部分が曲がっていないかをしっかりと確認しておこう。



フロントフォークの右側を上に向け、フロントダンパー(右)のダンパーロッドを差し込む。ダンパーロッド先端の側面には平らに削られた面があるので、それを外側に向ける。



ダンパーロッドを差し込み、左右にひねりながら押し上げて「取り付け位置」を探る。ダンパーロッドの上端と、フロントフォーク側の取り付け位置は「かみ合う形状」になっているので、位置が合うと「カチッ」という感触があり、ダンパーロッドを1mm程度押し込める。



③ビス(Eタイプ)を用意し、トップブリッジ上面の右側にあるビス穴にセットする。ハンドルバーが邪魔になる場合は、真上から見て作業しよう。

STEP  
12



1番の+(プラス)ドライバーを使い、ビス(Eタイプ)をねじ込む。ダンパーロッド先端中央のビス穴は、あらかじめタップが立てられているので、スムーズにビスをねじ込むことができる。

STEP  
13



ビス(Eタイプ)をしっかりと締め込んだら、②フロントフォークボルトヘッドを用意する。裏面には六角形の突起があるので、ビス(Eタイプ)を組み付けた六角形の穴にセットする。

STEP  
14



フロントフォークボルトヘッド裏面の突起が穴の形状に合うよう位置を調整し、真っすぐに押し込んで固定する。

STEP  
15



2号で組み立てたシリンダーヘッドカバーを用意する。中央上部に取り付けたブリーザーカバーがしっかりと固定されていることを確認しておこう。

STEP  
16



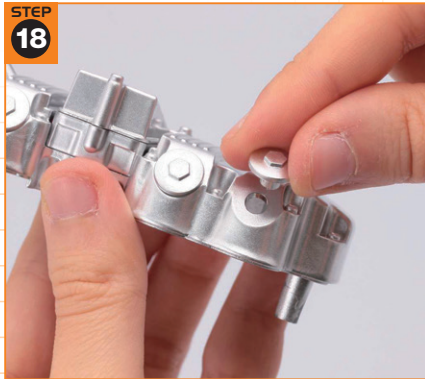
⑥タペットアジャスティングホールキャップを用意し、シリンダーヘッドカバーに設けられている穴にセットする。今回はフロント側の4カ所(※写真に写っている側)に取り付けを行う。

STEP  
17



タペットアジャスティングホールキャップをシリンダーヘッドカバーの穴にしっかりと差し込む。なお、差し込み部分がきつくて押し込めない場合は、シリンダーヘッドカバーごと逆さまにし、タペットアジャスティングホールキャップを平らな台に対して垂直になるよう押し付けると良い。

STEP  
18



⑰と同じ手順で、順番に4個のタペットアジャスティングホールキャップを差し込む。完成後の見栄えを良くするなら、キャップ中央にある六角形の突起の向きを同じ角度でそろえておこう。

## 今号の完成



これで今号の作業は完了だ。左右のフロントダンパーが備わり、フロント周りの完成形がイメージできるようになってきた。ライト類を点灯させるコードを傷めないよう注意し、次回の作業まで大切に保管しておこう。

## 🔧ビスの種類を覚えておこう

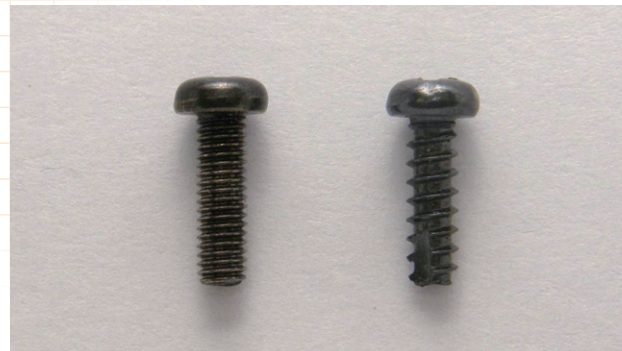
本シリーズの組み立て作業には、数種類のビスを使用する。太さや長さが似通っているタイプも多いので、間違えないようにするためにも毎号しっかりと整理しておく必要があるだろう。5号の組み立てガイド後半でも簡単に触れていたが、ここでは改めて、本シリーズで使用するビスの種類について説明しておこう。

### 🔧「ビス」と「タッピングビス」の違い

「ビス」はネジ山の間隔が狭く、「タッピングビス」はネジ山の間隔が広いということについては5号でも触れたので、ここではもう少し詳しく説明しておこう。

ビス穴に、ネジ切りを行う作業のことを「タップを立てる」ということは以前にも紹介したが、「タッピングビス」は、その作業を行う必要がない。このビスの正式名称は「セルフ・

タッピングビス」といい、「自分でタップを立てられるビス」という意味だ。そのため、タップを立てやすいようネジ山の間隔が広く、角度も深い。一般に「木ネジ」と呼ばれるのもこのタイプで、樹脂や木材などの比較的加工しやすい材質の固定に用いられる。本シリーズでは、ABS樹脂製パーツの取り付けに使用される場合が多い。



左が「ビス」、右が「タッピングビス」だ。ネジ山の細かさで簡単に見分けることができる。



トップブリッジFはABS樹脂製だったため、トップブリッジRへの取り付け作業は「タッピングビス」で行っている。



ハンドルバーホルダーはダイキャスト製なので、トップブリッジRへの取り付け作業では「ビス」を使用している。

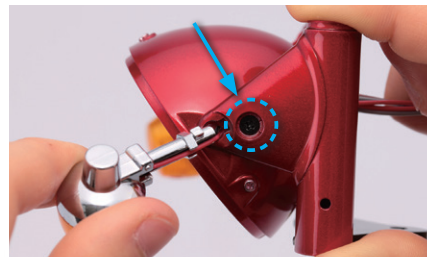
### 🔧皿ビスとナベビスとは？

写真のビスを見比べると、アタマ部分の形状が違うことに気付くだろう。左のビスはアタマが平らで、右側は丸くなっている。この形状の違いが「名称の違い」になっていて、左側を「皿ビス」、右側を「ナベビス」と呼んでいる。両者の違いは「完成後の見た目」にあり、皿ビスはパーツ表面にアタマが飛び出さないため目立ちにくく、表面にビスを隠す

パーツを取り付けることもできる。また、パーツ同士を組み付ける場合、ナベビスよりも皿ビスの方がより強固に固定することができる。これは「アタマの下側の面積＝パーツを押さえ付ける面積」の差によるもの。皿ビスは円すい状になっているので表面積が大きく、その分だけ強くパーツを固定することができる。



左が「皿ビス」、右が「ナベビス」だ。皿ビスは、取り付けした面を平らに仕上げたい場合や、ビス部分を隠したい、またはより強固な固定が必要な場合に使用される。



ヘッドライトケースをフロントフォークに固定しているビスが「皿ビス」だ。この部分には、後にビスを隠すための樹脂製プレートが取り付けられる。

### 🔧本シリーズで提供する主要ビス一覧

タイプ	種類	アタマの形状	サイズ	色
A	ビス	ナベ	2.0×6mm	黒
B	ビス	ナベ	2.0×5mm	黒
C	ビス	六角	2.0×5mm	銀
D	ビス	ナベ(※1)	2.0×5mm	黒
E	ビス	ナベ	2.3×6mm	黒
F	ビス	六角(※2)	2.0×5mm	銀
G	タッピングビス	ナベ	2.0×5mm	黒
H	ビス	皿	2.0×5mm	黒
I	タッピングビス	ナベ(※1)	2.0×5mm	黒
J	タッピングビス	ナベ	2.3×6mm	黒
K	ビス	キャップ(六角)	2.0×3mm	銀
L	ビス	六角	2.0×3mm	銀
M	ビス	ナベ	2.0×5mm	銀
N	ビス	ナベ	2.0×6mm	銀
O	タッピングビス	ナベ	2.3×5mm	銀
P	ビス	ナベ	2.3×5mm	銀
Q	ビス	六角	2.0×8mm	銀

※1→ワッシャー付きビス ※2→六角の先端に半球付き

ビスの寸法表記は、ネジが刻まれている軸部分の「太さ×長さ」で表され、アタマ部分の寸法は入らない。これはドライバーのサイズがビスの「太さ」によって規格化されているため。ただし「皿ビス」に関しては「アタマ部分を含むビス全体の長さ」となるので、注意が必要になる。また、特殊形状のアタマを持つビスは、脱着に使用する工具を指定するため、別途にアタマの寸法が付記される。